あいち防災通信

第8号
●発　行●
愛知県・あいち防災協働社会推進協議会

濃尾地震120年を経て
～想いをはせよう過去の被害～

左上／西春日井郡小田井村堤防大破壊ノ図
左下／中島郡一宮町震災ノ図
右上／西春日井郡西枇杷島町震災実景
右下／熱田町尾張紡績場器械所破壊ノ図
すべて愛知県図書館所蔵

濃尾地震とは

濃尾地震は、明治24年（1891年）10月28日に岐阜県美濃中西部を震源として発生した内陸活断層型地震です。地震の規模を示すマグニチュード（M）は8・0、日本の内陸で発生する地震としては最大級のものとなりました。エネルギーは三河地震（昭和20年・M6・8）の64倍、阪神・淡路大震災（平成7年・M7・3）の11倍であることを考えると、いかに大規模な地震であったかが分かります。

内陸活断層型地震とは

地表を覆うプレートがぶつかり合うことで生まれる力（ひずみ）は、陸のプレートの内部、つまり日本列島の地下に働き蓄積されていきます。蓄積されたひずみが限界に達したとき、岩盤の破壊が起こり、地震が発生します。これを内陸活断層型地震といい、岩盤が破壊され、ずれることを断層運動といいます。また、震源域が都市部に近接している場合は都市直下型と通称されます。

活断層とは

活断層とは、第四紀（約200万年前）から現在までの間に動いたとみなされ、将来も活動することが推定される断層のことをいいます。

この活断層が確認されている箇所ではもちろんのこと、活断層が確認されていない箇所でも地震の発生に気を付けなければなりません。過去に地下で地震が発生しても、地震の規模が小さいため地表にまでずれが及んでいないことがあります。また、ずれが地表にまで及んだ場合でも、地表付近に残された痕跡が長い時間を経て風化などのため、不明瞭になってしまうことがあります。このような理由で、活断層が確認されていない場所でも、その地下には将来地震を発生させる活断層が存在している可能性があります。

愛知県の被害

濃尾地震は、震源地である岐阜県美濃地方のみならず、愛知県にも大きな被害をもたらしました。地震による被害は、全国で死者7，273人、全半壊家屋数222，501戸と記録され、うち愛知県では死者2，339人、全半壊家屋数114，627戸と記録されており、死者の約3割、全半壊家屋の半数が愛知県内で発生しました。

愛知県で最も多くの被害を出したのは中島郡（現稲沢市、一宮市）であり、続いて西春日井郡（現清須市、北名古屋市、名古屋市西区、名古屋市北区）と濃尾平野の北西部に被害が集中しています。濃尾平野は、木曽三川（木曽川・長良川・揖斐川）から土砂が運ばれることでつくられた平野であることから、各地で揺れによる液状化が発生し、河川堤防に甚大な被害をもたらす主な原因となりました。

愛知県では、今、東海・東南海・南海地震という海溝型地震の発生が注目を浴びてきています。しかし、濃尾地震のような内陸活断層型地震の発生も忘れてはなりません。いつ、どのような地震が発生しても自らの命を守れるよう日頃から準備をしておくことが大切です。

濃尾地震が残したもの

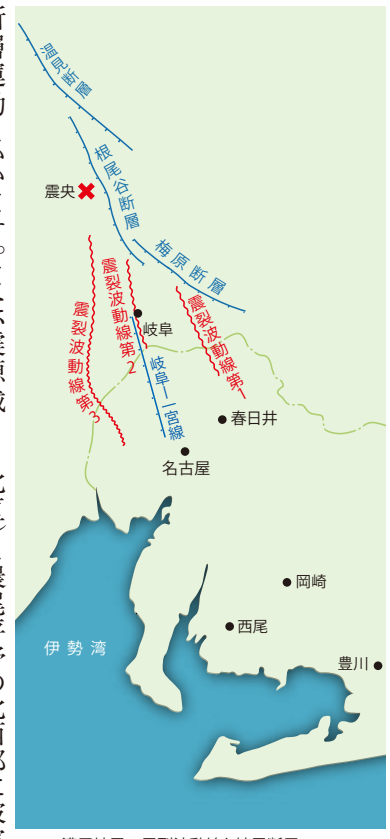
濃尾地震は明治以降、近代日本が遭遇した初めての巨大地震であり、耐震建築や地震研究など、日本における地震防災の出発点となりました。

災害医療救援

濃尾地震では様々な団体による災害救援活動が行われましたが、中でも医療機関等による救援活動として、日本赤十字社や地元開業医、愛知医学校などによる治療活動が大きな役割を果たしました。これが、今日行われている民間ベースの救援活動の原点となっています。

マスメディア

濃尾地震は、当時の様子を伝える数多くの写真が残っています。この地震は近代マスメディアが普及してからの最初の地震でもあり、日本全国が短い期間で地震の情報を共有することとなりました。また、新聞社などにより義援金の募集がなされ、災害時にマスメディアが報道以外でも活躍するさきがけとなりました。



濃尾地震の震裂波動線と地震断層
2面「あいち防災協働社会推進協議会から」参照